



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会前副理事長。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ、出版やインターネット配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも行っている。

392

日本のテレビ局

# 隠し事に国民は納得しない

ドクター和のニッポン臨終回巻、最後の原稿となります。気が付けばこれが第392回目の連載だそうです。第一回は2017年4月で、ムッシュかまやつさんの死を追悼しました。

約8年近く、さまざまな著名人(安楽死させられた競走馬や、迷いクジラの死なども時折書きました)の逝き方、死に方を見つめ続けました。以前は書くべき人物が見当たらず、新聞の訃報欄から懸命に探すこともありましたが、コロナからここ数年は逆に、今週は誰を書くべきかと悩むほど訃報が多いです。つまり日本は確実に多死社会になっているということ。また以前はほとんど見かけなかった「老衰」「認知症」といった死因も珍しくなくなりました。死因にも流行があるようで

す。さて最後はどうやって締めくくべきか? フジサンケイグループであるタカフジさんを困らせるかもしれないけど、「日本のテレビ局」の臨終について書きます。

2025年1月、日本の大手テレビ局は死にました。その詳細はここで語るまでもないでしょう。テレビ局が記者会見でテレビカメラを制限したのだから、これはもうテレビ局の「自殺」です。死んだものにやり直しはききません。

その傲慢さと閉鎖性は、フジテレビに限ったことではない。たとえば私は、先のコロナワクチンで亡くなった方のご遺族の支援を続けていますが、2023年にはNHKの「ニュースウオッチ9」が、3人のご遺族を取材。その後、ワクチン死ではなく

コロナ感染で亡くした遺族のように報道し、BPO(放送倫理・番組向上機構)の組上に挙げられ番組で謝罪をしています。ワクチン被害の報道があまりにも矮小(わいしょう)化されており、それは現在も続いています。

他の民放局でもコロナ禍の真ただ中に僕に出演依頼があり、「イベルメクチン」という薬を紹介したら「打ち合わせで確認していない話をするな!」とディレクターから怒られ、それきり出演依頼は来ていません。テレビの人の多くは視聴者ではなくスポンサーや政府の顔色をうか

(写真はコラージュ)



が番組を作っているのだと学習しました。最近、「SNSでのフェイクニュースに騙(だま)されるな」とテレビは注意喚起をしますが、隠し事ばかりする組織にそんなことを言われても国民はもう納得しないのではないのでしょうか。

今から60年以上前、「一億総白痴化」という言葉が流行しました。ジャーナリストの大宅壮一氏が、テレビばかり見ていると国民全員馬鹿になると主張した造

語です。しかし、国民は学習しました。これ以上テレビを見ても何も真実は得られないのだと。もちろんネットの情報も玉石混交です。それに騙されないリテラシー能力を、一人一人が培っていくしかありません。さようなら、テレビ局。 —おわり